

---

# ペルソナ～リバウンド～

rai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ〜リバウンド〜

### 【Nコード】

N6745Z

### 【作者名】

rai

### 【あらすじ】

ペルソナの二次著作になりますが、自分の考えるペルソナというもので、ゲームの設定などは特に気にしておりません。

## オープニング

白い錠剤を噛み砕く。

閑散とした宵に響き渡るその音は非常に不気味を感じさせ、口の両端を吊り上げながら闊歩するその姿は悪鬼羅刹のようですらあった。

ぼろぼろと零れ舞う噛み砕かれた錠剤の欠片。その緩慢に舞い落ちる動きが瞬間消えるほどに加速したのは、少女の一步が原因だった。彼女の踏み込みと同時に空間が歪み刹那に割れ、無数の黒い斑点がその中から蠢き、形を得ようと密集していく。

「ペルソナ！」

そして放たれた言葉は契機である。途端、密集していた無数の黒たちは流動の果てにはつきりとした形を成し、少女の頭上に現れる。

長方形の穴が四つほど空いている菱形の仮面の上には、兎のような長細い二つの耳。十字にクロスする、鉄の棒のような胴体部から伸びる二振りの刀は、獲物を今か今かと待ち望んでいるように月光を受けて鋭利に煌めいている。それらを支える脚部は余りに細く、最下部に足袋のような形が僅かながら確認できるだけだった。

「アンデレ」

少女の言葉を受け、仮面に空いてある長方形が薄緑色に光った。全体的に黒い色彩を纏う外観の中でその薄緑は気味が悪く見える。

「狩れ！」

少女の肩まで伸びる漆黒の髪が靡いた。彼女のペルソナであるアンデレは、地から、空から湧き出てきた様々な闇たちに一瞬で近づくと、二刀を乱暴に振りまわし、それらを擦じ伏せ霧散させていく。技量など不必要とばかりにただただ暴れ回るそれはさながら暴風のようにであった。

「微かな残り香を追ってここに来たけど、どうやら正解だったよ  
うね」

眩くその声は凜とした響き。先程まで浮かべていた笑みは闇たちと共に溶けたようだ。

乱れた髪を整え、背筋を伸ばし月へと両手を組んで伸ばす。それから右手の親指と中指を擦り、パチンと乾いた音を鳴らした。同時に、アンデレは黒い粒子に戻り、すぐさま姿を消した。

少女は歩きだす。その歩調に乱れは無い。

雪も降ってきそうな、乾いた寒い夜に白い吐息を乗せながら彼女は、北ノ沢市に辿りついたのだった。

## オープニング（後書き）

初めての投稿で初めて挑戦する二次創作です。

駄文であり、ペルソナファンの方々にはお目汚しであります  
が、読んでいただければこれ幸いです。

## 一章一話 「Hear a rumor」

溜息が出る。その起因は、青春真つ盛りと呼べる年頃に相応しい恋や勉強について悩みではない。しかしかといってその他に悩むべき何かがあるわけでもなかった。だからこそ彼は、溜息をついているのだ。

そう、何も無い。何も無いのである。

友人はそこそこいるし、成績は振れ幅の小さいメトロノームのように揺蕩たつている。スポーツもできないわけではないが自慢できるほどではない。可愛いと思う女子は数人いるものの、心ときめくかと問われれば、そうでもない。

つまり彼は退屈していたのだ。余りに何も無いこの街に、この学校に、自分に。

かといって戦隊ヒーローを夢見られた頃は遙か遠く、彼は悟らざるを得ないのだ。この退屈は、誰しもが持つ当たり前だということ。そしてその退屈はどれだけ能動的に動こうと、どうしようもない当たり前だということ。

だから彼は襲い来る眠気を払うべく頭を振り、まっさらなノートに授業内容を書き留め始めるのだ。

そんな彼の頭に丸められた紙クズが直撃した。今度のため息は呆れによるものだ。その紙クズが誰によって投げられたのか幾度の経験から理解している。だから彼はノートを千切り、ぶつけられたものより少しだけ大きめに丸めて、教師が黒板に板書をする隙を見計らい後ろに振り返って投げつけた。

しかしその反撃は、こんな時にしか使われることのないノートによって防がれた。そしてそのノートの主は憎たらしくも小さな舌を突き出し、用意していた紙クズの大群で反撃する。

二人の席は人が歩けるような小さな通路に隔てられてはいるが、きつちり対頂角で結ばれており、こんな光景はいつものことなのか

他の生徒たちは特に気にする様子がないし、止めようともしない。

紙クズマシンガンの掃射を受け、少年は頬を引き攣らせた。この眼前の少女が童顔と幼児体型に相応しい性格の持ち主であることは心得ている。心得てはいるが、だからと言って身体中白い粒だらけになったこの憤りを抑えることはできない。例え、挑発に乗り、同じような精神年齢であることを露呈しようとも。

やり返すべく紙クズのストックを大量に作り、彼は再び振り返る。しかし先程まで心底面白そうに笑んでいた少女の顔は、恐ろしさを感じさせるまでに真面目なものになっていた。

その理由に気付くのが一步遅かった。頭が掴まれる感覚がして、体を一度大きく震わせる。

「ゴミ塗れで何をやっているんだ、桐明？」

少年、宮原桐明は極めて冷静に応える。

「先生はこれをゴミとおっしゃいますが、それはこの紙たちに失礼だと思いませんか？僕は、材料源となる木に対しても、製紙された工場の方々に対しても常に真摯な気持ちで向き合いたいのです。そしてこれはその真摯な気持ちを具体的に表した結果なのです」

「そうか。紙に対しては真摯な気持ちになれても、俺の授業には真摯になれないというわけだな？」

ぐりぐりと後頭部を強く撫でられ、桐明はハハ、と苦笑いを浮かべながら沙汰を待つ。

「桐明、廊下がお前に恋焦がれているらしいぞ」

「ですよー」

憐れな少年は笑いを必死に堪える少女を一瞥し、それから黙って廊下に向かう。

「ああ、あと琴原」

「え！？」

突然名前を呼ばれ、少女、琴原皐はびっくりしたように目を見開けた。毎度のことだというのに、どうしてそう驚愕に満ちた表情をするのか桐明には分からない。

まさか本当に、自分は関係ないとシラを切れたつもりでいるのだろうか。

「お前も廊下に立っている」

そう、結局二人で立たされることになるのだ。

桐明が教室から出て、誰もいない静まり返った廊下を眺めること数十秒、臯が頬をハムスターのように膨らませながらやって来る。

「なんで私まで・・・」

「なんでって、明らかにお前が原因だからだろ」

「見つかったのは桐明じゃん。桐明が見つからなければ私が廊下に立たされることもなかったの！」

そう言っただけで睨みつける、つもりなのだろうが上目遣いにしか見えない。桐明は、本当にこれが高校一年生なのだろうかと頭を悩ませるのだ。

「それにしても、暇だな」

窓ガラスから見える町は非常にのどかである。その中心部には大型デパートやそれなりに高いビルが建っていて、時代の流れについていけない老人たちが近年急激に発展した中心部を見ながらこの町も随分と変わったもんだと目を細めてはいるが、桐明にとってそれは当然の光景なのだ。それに、中心部以外は緑の方が多い。この町は確実に、田舎だと言える。

「暇、かあ。じゃあちよっと、刺激的な噂話でもしてあげようか？」

罰として廊下に立たされていることなど臯の頭にはないようだ。

「いいよ。どうせ、酒屋のお爺さんがお化けと白い布団を見間違えたとか、拳銃を初めて手にして喜びのあまり運動会でそれを使用した警察官とか、そんな類の仕様もない話しだろ」

「暇っていつから話してあげよーと思ったのに、もういいよ」

そっぽを向く。快闊な印象を受ける短めに切りそろえられたショートカットが動きを受けて揺れ、横顔を軽く隠す。だが、面白いことに爛々と輝く大きな瞳は隠しきれない。それが話をしたそうに煌



いていることを、桐明は察していた。

しばらく放置すれば自分から話したすのだから彼も暇であることは確かだ。面白いかどうかは置いておいて、授業が終わるまでただ立っているのは辛い。幸い、クラスで授業を行っている教師の声は廊下に響き渡るほどうるさく、小声で話せば気付かれる可能性は低い。

「ごめん。やっぱり、暇だから話してくれ」

すると臯は嬉しそうに満開の笑顔を浮かべ、それから急に顔を赤らめたかと思うと、咳払いをして人差し指を立てくるくると回しながら言うのだ。

「し、仕方ないなあ。そこまで言うのなら話してあげないこともないよ?」

「あ、ああ。よろしく」

やっぱりいい、という言葉をどうにか飲み干して愛想笑いを浮かべる。気を良くしたのか臯は、天保山と比べるのも大変失礼なほどに断崖絶壁な胸を逸らして口を開ける。

「人づてに聞いた話だから私も詳しいことは分からないんだけどね・・・最近夜になると、この町に出るらしいよ・・・幽霊が」

「幽霊? やっぱり酒屋のお爺さんの話じゃないか」

「最後まで聞く!」

注意され頭を掻く。正直、幽霊ネタは目の前で自慢げに話す少女から聞き飽きているのだ。恐らく今回も、いつもと同じようなネタなのだろうと思い、元から殆どなかった話への興味は皆無になってしまった。

「それで?」

それでも話を促すのは礼儀だ。

「掉神社の近くにある骨董店知ってる?」

「ああ、気のいいお爺さんがいた店か。子供の頃、飴をもらった覚えがある。結構前に亡くなったって聞いたけど」

「うん。その骨董店のお婆ちゃん、つまり、そのお爺さんの奥さ

んなんだけどね。幽霊を見た、ってつい最近いろんな人に話していたらしいんだけど・・・」

桐明の眉根が険しくなる。その先は、あまり面白がって話していることではないような気がしたのだ。だが皐はそんな桐明の様子に気付くことなく、話を続ける。

「それから姿を見かけた人がいないんだって。娘さんが搜索願を出しているんだけど、見つかっていないらしいよ。もしかしたら、お婆さんが見た幽霊が」

「あんまり、楽しい話じゃないな」

そう言い肩を竦めると、皐はばつの悪そうにしゅんとした表情を浮かべる。調子に乗って話していたことを、今さらながら後悔しているらしかった。

チャイムが鳴る。桐明が皐の額にデコピンをかましたのはその時だった。

「いった！・・・何するの！」

「次、昼休みだぜ。早く購買に行かないと、お前の好きなパン売り切れるんじゃないか？」

「あ、そうだ！」

皐曰く、わさびと生クリームを見事に調和させ、まるやかでいてピリツと引き締まった後を引かない辛さが癖になる、らしいワサクリームパンが売り切れになることはよもやないだろうが、それでも桐明は親切に忠告する。

「それじゃあ買いに行つて来る」

さつきまでの陰鬱とした雰囲気はどこへやら。それが皐の短所でもあり、長所でもある、と桐明は思うのだった。

「あ、そうそう」

可愛らしい小さな財布の中身を確認し、渋い顔でその中身の少なさに絶望しながら皐は思い出したよう言う。

「運動会で拳銃を発射した警察官。その馬鹿、私のお兄ちゃんのことだ」

「え？」

本当かどうか分からない噂話より、そのカミングアウトの方が真実味のある分、強烈だった。

一章一話 「Hear a rumor」(後書き)

ペルソナは、3をクリアし、4は途中でやめてしまいました。ただ4のアニメは見ています。が、他は全く知りません。一番面白いナインバリングは何なのだろう。

わさびアイスというものがあるらしいです。食べてみたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6745z/>

---

ペルソナ～リバウンド～

2011年12月23日05時55分発行